

【論文】

内在的知識と外在的知識

知識の社会的実現形態について

Social reality of knowledge, internal or external

諏訪敏幸

SWA, Toshiyuki

キーワード：知識；信念；スキーマ；情報；集団；コミュニケーション；データベース

Received: 2014.11.30 Accepted: 2015.2.14

1. はじめに

伝統的な情報諸科学では、知識は「基本的には、個人により構成されるもの」（大須賀節雄[他], 1996, p. 20）だと考えられてきた。これに対し、個人の手を離れ、直接的には個人に帰属しない知識の社会的存在を認めるべきだというのが、本稿の基本的な問題意識である。

そのため本稿前半では、個人に内属する知識—これを本稿では「内在的知識」と言う—が唯一「知識」と呼び得るものだという従来の考え方を批判する。その上で、外部化された知識である「外在的知識」の概念を提示し、内在的知識と外在的知識という2つの形態で社会的な知識は構成されると主張する。本稿後半では、外在的知識が加わることで社会的知識の全体像がこれまでの内在的知識1形態のみの「知識」像と異なってくることに注意を向ける。そのため、それら2形態がどのように運動（形成、発展、消滅）し、またどのような辺縁部を持つかについて簡略に述べる。最後に、知識が社会的なものである以上避けられない集団性の問題について論じる。

中岡成文(2008)によれば、「知識」は分節言語によってはじめて構成され得るものから非言語的な体験の内面化に至るまで、ある広がりを持つ概念である。本稿は、学術知識・学術研究を主対象とする科学社会学—科学計量学研究の一環である。そのため言語的知識をその中心に置くが、それに止まらず、中岡が指摘するような広がりの中で社会的に「知識」として現れるものを広く「知識」として扱う立場に立つ。他方、本稿の隣接領域である科学哲学における「知識」概念は、その真理値が「真」であることを必須条件としている（Armstrong, 1973, p. 137ff.; 戸田山和久, 2002）。しかし本稿では知識の絶対的・客観的な真偽は問題にしない。主観的にひとまず正当と考えられる知識、意見、解釈などは、それに付随する判断も含め、すべて知識に包含して扱う。その意味で、本稿における「知識」は哲学の用語ではむしろ「信念」に近い一面がある。

2. 内在的知識と内在的知識唯一説・「知識＋情報」説

2.1. 内在的知識の特別な地位と内在的知識唯一説

情報科学に限らず一般に、知識は個人に内属するものと考えられている。この立場によれば、知識とはすなわち内在的知識であり、内在的知識は唯一絶対的な地位を占める。

内在的知識は自他が厳然と区別される知識である。自らの内在的知識は、直接的に内観でき、かつ内面で操作できる。他人の内在的知識は直接的に見ることも操作することもできない。そのため、どの個人にとっても自分の内在的知識は主観的に特別の地位にある。これを普遍的な事実と考えれば、内在的知識は一般的に特別の地位を持つことになる。

2.2. 「知識＋情報」説

この立場からは、知識が言語や図像などの形で表出されるのはもっぱら流通のためだと考えられる。このとき、外部化されたものは情報という概念で、または情報を外形化・規格化したコードという概念で、説明される。伝統的な情報諸科学では、「情報」について広義から狭義までさまざまなレベルで定義が与えられてきた(吉田民人, 1971; 児島和人, 1999, pp. 125-135)。中には人間形成・人間行動との関係を基軸とするような見方(藤本隆志, 1988, pp. 292-294)もあるものの、概ね物質的なパターンまたは熱力学的なエントロピーで概念化される情報を最広義に、以下、環境から人間への刺激、有意味の記号集合、人間の行動選択に関わる記号集合等々として、情報は概念化されている。つまり、物質のパターンが最も基底的な要素であり、これに加えて、人間にとっての自然的または人工的環境であること、有意味性、操作可能性、意志決定との関わりなどの要素が順次付け加えられている。

一般に、情報は知識そのものではないと考えられている。知識は総合的だが情報は断片的である。知識の一部が情報としてエンコード(コード化)されたのが文章や図表であり、読者はそれをデコード(復元)して再び内面的な知識の一部とする。図式的には、個人の知的活動という内面的セクターとコミュニケーションという社会セクターとが別々にあり、情報化された知識の断片がこれらの間をいわばレーのバトンのように受け渡されていくのだという考え方である。今日この考え方は、知識と知識流通についての概ね標準的な理解として、学術的にも、また一般社会においても、広く受け入れられている。これをここでは「知識＋情報」説と呼ぼう。内在的知識唯一説は「知識＋情報」説でもある。

2.3. 「知識＋情報」説の限界

「情報」と「知識」では概念的な抽象度および具体的な現象との結び付きの度合いに差があり、「情報」で説明できるのは、「知識」という概念が指し示す現象の一部に止まる。「知識＋情報」説では、例えば次のような問題について十全に説明することができない。

- ・言語・図像などの形で外部的に表現された情報が「独り歩き」という事実: 「独り歩き」とは表現者の意図を超えた社会的拡散を意味するが、加えて表現者の意図と異なる受容が現れることをも含意する。時により発信者(例えば著者)以上に第三者(読者・評者)にこそよりの確で深い受容が現れる場合もある。

- ・集団的な認識の集約としての法律や宣言文： 集団的な認識が何ものかについては諸説がある。しかし「知識＋情報」説に従ってそれが個々人の内面に属するものだと考える限り、それらは何らかの方法で連結されているとはいえ個々ばらばらな、かつ各個人の立場や内面的文脈の違いによって異なる内実を持つ存在である。他方、外部化された法律や宣言文は、このような個別的な文脈を失い、法律制定者や宣言文起草者といった個々人の内面を離れ、それ独自の（例えば法的あるいは政治的な）文脈の中に置かれて万人に對置される、理念的に単一の存在となる。
- ・集団や個人によって外部的に形成される「知識の塊」としての集積的記録・データベース： 集団的に形成されるデータベースでは、個々の情報提供者は小部分の知識を断片的に入力するに過ぎないが、それによって個人の知識を超える有機的な全体像が構成される。例えば後述の戸田山和久(2002)もほぼ同じ例を挙げているが、ヒトゲノムの全体像の知識は、外部的に形成された知識の総体—論文の集積やゲノム・データベース—以外の場所には存在しない。また犯罪者の指紋データベースでは、人物のプロフィール、犯歴、指紋など個々別々の断片的知識が関連付けられ、その集積からは「照会の指紋に該当する既知の犯罪者なし」といった質的に新しい知識も生まれる。個人的な集積の場合も、例えば読書カードの集積は、当の本人から個々の記憶が薄れた後も逆に本人に知識を提供する。さらに、ある記事が他の記事への理解のヒントとなるように、集積それ自体が本人に新たな知識をもたらす。

これらはいずれも、個々の情報発信者の内面には存在しない知識が図書・法律・宣言文・データベースなどに現れる例である。知識をコード化したものが図書等々だと主張する「知識＋情報」説では、これらを「知識×エンコーディング→コード；コード×デコーディング→知識」という図式の枠内で、コードの集積として説明しなければならない。しかしコード化とはその対象が持つ情報の一部を抽出し、ある規則の下で規格化すること、つまり情報量を減少させる操作である。そうであればコード化された情報は、その元となる知識以上の内容を持ち得ない。にもかかわらず元の知識より豊富な内容がそこに現れるとすれば、新たに現れるものは上記の図式の外に求めざるを得ない。この時点で既に「知識＋情報」説の自立性は失われ、コード化の上位に位置する系を抜きには説明が成り立たなくなっている。もともとコード化それ自体がコードに意味を与える上位の系を前提とする。ここに更に、外部環境からの情報の追加・干渉、並行する他の過程との絡み合い、コードへの背景情報織り込みなどの説明を追加するなら、何にせよそれら全体を自らの下に構造的に組み込んで統合する上位の系あるいは層（レイヤー）の介在が不可欠である。こうした複合的過程の鍵となる要素は、コード化過程そのものよりもむしろより上位の系にある。

このように「知識＋情報」説から出発してさえ、上に挙げたような例を説明するには、外部化された情報がもはや内在的知識の単なる「影」ではなく、上位の系の下で内在的知識と並ぶ別の何ものかだという考えに至らざるを得ない。その場合に上位の系となり得るものは、個々人の内心を超えた社会的文脈の中に求められる。この廻り道の帰結として、われわれは「知識＋情報」説を捨て、内心を超えた社会的文脈の下で内在的知識と他の何ものか—外在的知識と呼んでも良いだろう—が並立するという図式に到達する。

3. 外在的知識

3.1. 戸田山の「知識のさまざまな実現の仕方」

戸田山和久(2002)は「知識のさまざまな実現の仕方」という考え方を提示し、図書なども知識の多様な実現形態の1つとした。以下少し長くなるが、該当箇所を引用する。

伝統的認識論は、信念という心的状態にさらに何かが付け加わると知識になるという問いの立て方をする。これがようするに「知識の定義」の問題と言われているものだ。しかし、前章で指摘したように、この問題設定は、伝統的認識論に特徴的な知識の個人主義の帰結として現れたものにすぎない。…[中略]…むしろ事態は逆で、信念の方を知識のさまざまな実現の仕方の一つだと位置づけなければならない。ホモ・サピエンスのDNA配列についての知識がどの個人の信念としても実現していないことから明らかなように、知識はさまざまな形でこの世界に実現しうる。…集団を担い手として考えざるをえない知識もあるし、データベース中にしかない知識、図書館に蓄えられた知識など、個人の信念ではない知識がたくさんある。(p. 248)

上掲の議論は、伝統的認識論に対する検討を受けて、今後の認識論の展望として述べられている。この問題が同書中で詳しく議論されている訳ではない。

ここではひとまずこの議論を筆者なりに次のように整理してみよう。

1. 知識にはさまざまな実現形態がある。
2. 個人の信念のような心的状態も、集団によって担われる知識も、「データベース中にしかない知識、図書館に蓄えられた知識」なども、さまざまな実現形態の一種である。
3. 社会に存在する知識は、こうしたさまざまな実現形態から構成される。

3.2. 外在的知識の構造的性とそれに由来する多様性

以下ではこうしたさまざまな実現形態のうち、個人に内属する知識を内在的知識、個々人の内心から独立してその外部に実現された知識を外在的知識と呼ぶ。

外在的知識は、独自の構造的性と、それに由来する多様性を持っている。例えばクラスの名簿は、その排列が氏名順か、成績順か、はたまた修学旅行の班別かで、提供する知識が異なってくる。データベースはそれがどのようにインデックスされ、また検索システムがどんな機能を持つかで、検索し得るものもその意味も違ったものになる。Borwein and Devlin (2009/2009, p. 77)は、解決困難なある2階常微分方程式を数式処理プログラム「メイプル」に与えたところ、メイプルは大方の数学者が聞いたことも無い HeunG 関数という関数を見付け出し、これを使って解決できることを示したという例を紹介している。この解法は1つの知識である。この場合、メイプルとそれが使用する関数や定理のデータベースを合わせた全体が1つの外在的知識だと考えなければならない。検索システムやメイプルがデータベースに構造的に組み込まれることで、それら全体がまた新たな1つの外在的知識とな

なのだと言える。このような構造化された組み合わせは、例えばウェブ上のデータとサーチエンジンおよび検索アプリの組み合わせのように、無限の多様性を持つ。

3.3. 外在的知識は「情報」か？

では、知識がわれわれの外部に「実現する」とはどういうことだろうか。またそこで「情報」はどのような役割を果たすのだろうか。これについて2種類の理解が可能である。

戸田山は上掲の引用に続く箇所、さまざまな実現形態の「知識」を統一的に扱うための基礎概念は「情報」ではないかと言い、「どのような形で保持され使用されている情報が知識なのか」という問いを提出している。これに従えば、そこにあるのは情報であって、保持・使用のされ方という条件に応じてそれが内在的・集团的・外在的などの知識として実現する（あるいはしない）のだということになる。これが第1の理解として成り立つ。

しかしこの考えには、次の4つの難点がある： 1) この説では先述のような入出力された知識の質的・量的不一致の問題を解決できそうにない； 2) 「知識＋情報」説では知識と情報の抽象度のギャップが問題であり、このギャップを埋めるものとして戸田山は情報の保持・使用のあり方という条件を提出しているのだが、これらはギャップを埋めるものとして適当かつ十分とは言えない； 3) 以上から、上述の第1の理解では結局さまざまな難点を抱えたままの「知識＋情報」説に逆戻りすることになる； 4) データベースやウェブサイトでは、個々の文章やデータそのものが持つ情報だけではなく、データベース設計やデータ編集のレベルで個別知識とは別次元の要素として意図的に加えられた関係性や構造も含めて知識が実現されるが、これら全体を「情報」という概念でひと括りにはできない。知識の基礎が情報だということも、限定的にしか言えないと考えられる。

これに対し著者が提起する第2の理解は、図書やデータベースそれ自体が社会的に文字通り「知識」だというものである。机やコップが「そこにある」のと同じく、（さまざまな留保が必要ではあろうが）知識が「そこにある」という考え方である。情報は形態・媒体・構造の異なる知識間で受容・変換が起こる時その接点に（例えば後述 4.3 のように）、また外在的知識の外形的増減が起こる時その変化の測度として、姿を現す。

4. 内在的知識と外在的知識にわたる知識の運動

4.1. 知識の運動

知識は単に「そこに在る」ものではなく、変化し運動するものである。すなわち、形成され、発展し、表出・受容され、抽象・総合され、変形し、文脈化・脱文脈化し、価値化・無価値化し、劣化・消滅する。知識はその運動においてこそ理解される。

内在的知識唯一説では、内在的知識の運動がすなわち知識の運動であり、個人の外で生起するのは知識をコード化した情報とそれを担う物質的媒体の発生・伝達・蓄積・増減・劣化・消滅等々だった。この考え方によれば内心の知的活動と情報の社会的プロセスは、場面・層を異にする。全体として社会的知識の総体を構成するとはいえあくまでも別々のプロセスであって、一体的に理解する対象とはならない。これに対し外在的知識を認める

立場では、個人外の情報とその媒体のプロセスは、同時に知識そのものの運動のプロセスの一部である。その際、次の3つが新たな問題として追加される: a) 内在的知識と外在的知識の運動のあり方の違い; b) 全体的な社会的運動過程における各々の役割と相互関連; c) 内在的知識と外在的知識の直接的な関係、つまり表出と受容における知的変化。

以下これらについて主要点を概観し、また c) の核心であるスキーマについて述べる。

4.2. 外在的知識と内在的知識の特性・役割

知識の運動を考える上で、内在的知識と外在的知識の変化のメカニズムの違いは重要である。違いは劣化、つまり内在的知識における忘却や記憶の誤りと外在的知識における媒体の物理的劣化との違いにも現れるが、最も際立った違いは発展的变化の局面にある。外在的知識の変化は、既存の外在的知識に何かを付け加えたり、一部を書き換えたり、削ったり、構造を変えたり、媒体を変換することでも起こる。つまり外形的・部分的な変化を通じて、外在的知識は変化する。これに対し内在的知識は、個人の内面で意図的にせよ無意識的にせよ既存の知識がいわば化学反応を起こして総体的な内部関連の中で変化する。

さらにもう2種類の変化が個人に関わって発生する。一方で、外在的知識を個人が受容して内在的知識に取り込む際に、個人ごとの受容の違いが生ずる。これにより、1つの外在的知識がそれを受容した個人の数だけ別々の内在的知識になる。他方で、内在的知識を個人が表出して外在的知識を生み出す際に、個人ごと、その都度ごとの違いが生ずる。ただし違いが生じないことや、また例えば起草者の手になる宣言文に多数の人々が署名するときのように、異なる内在的知識が単一の外在的知識に収斂することもある。

一方で受容のメカニズムによって知識は分裂し、他方で表出のメカニズムによって知識は分裂したまま一部が外部化され、時にさらに分裂を重ね、さらに時には収斂もする。

4.3. 外在的知識の内面化と認知心理学におけるスキーマ

受容時の変化のメカニズムは、外在的知識の受容だけでなく感覚的受容や体験の受容も含めて、認知心理学におけるスキーマという概念で説明される。

認知心理学では、内在的知識のある大きな部分をスキーマという概念で扱う。スキーマは「過去経験や外部環境に関して長期記憶中に構造化された知識の集合」(川崎恵里子, 2012, p. 148)である。学習や認知との関係では「既有知識」という概念も現れるが、それが指し示すものはスキーマと同一である。学習・認知・記憶再生はスキーマないし既有知識の影響を受ける。例えば、「まったく同じ情報に接しても、それまでにどのような知識を持っているかによって、何を学ぶかは大きく変わってくる」(高野陽太郎, 2013, p. 307)、「想起は単なる再現過程ではなく、再構成の過程である。… 彼ら[被験者]のスキーマに一致するように原文が歪曲される …」(川崎, 2012, p. 148 での Bartlett, 1932 の紹介)などとされる。

この立場から見ると、個人に内在する信念という概念には、構造化された知識であるスキーマに当たるものと、その下での解釈・判断・主張など過程的なものとが複合しているように思われる。後者の一部は何らかのメカニズムでスキーマに組み込まれていくと考えられる。このような動的構造を持つことが、内在的知識の特性だと言える。

5. 内在的知識と外在的知識にわたる知識の辺縁

5.1. 知識の辺縁

内在的知識唯一説では「知識」とはすなわち内心のある状態つまり信念の一種であり、ある信念が知識か否かは、主にその真偽という単一の次元で線引きされる。本稿の立場では、これに3つの変更が加えられる。第1に、個人に内属する心的状態であることを条件にしない。第2に、ここまでにも述べてきたように、真偽を線引きの基準にしない。第3に、外在的知識が加わることによって新たな幾つかの次元が追加される。その一部は外在的知識に特殊な問題として追加されるものであり、また一部はもともと内在的知識にもあったが明瞭でなかった、そして外在的知識では明瞭に意識せざるを得ない、問題である。

5.2. 線引きの基準にならない要件

まず、本稿の立場では線引きの基準にならない要件を、再度確認したい。

第1に、客観的真偽は知識か否かの条件にはならない。哲学的にはここは核心的問題かもしれない。しかし社会的に知識を見る上では、正否に関わらずいったんすべて知識とした上で、その中に正しい知識も誤った知識もあると考える方が、扱いやすい。例えば、1冊の本の各部分を取り上げて「この部分は（正しいので）知識である、この部分は（誤っているので）知識ではない」などと複雑に考えるより、「この本に書かれていることが全体として知識であり、その中に正しい部分・誤りの部分・正否が言えない部分などがある」とした方が、描像として明快で扱いやすい。本稿の立場では、外在的知識の真偽は既存知識に依存し、スキーマを通じた知識間の接点で評価される。

第2に、これまでの例示で明らかのように、外在的知識は人間に受容可能である限りその媒体が何かを問わない。コミュニケーションの諸形態は、すべて外在的知識の物質的形態として適格である。媒体の特質によって、例えば会話のようにすぐに消えさるもの、植物図鑑のように非言語的表現を主としたもの、磁気媒体に記録されたドキュメントのようにそれ自体は人間の感覚器官で受容できない（しかしそれを感覚的に受容可能な媒体に変換する手段が社会的に存在し、実際にそのようにして受容される）ものなども、すべて外在的知識であり得る。感覚器官を経由することも必須ではない。SFに現れる、知識を人間の脳に直接伝えるような装置が現実存在するとしたら、そのような方法で伝えられるために用意された記録は感覚器官を介さなくても外在的知識と言えるだろう。

5.3. 知識ではないもの—新たな線引き問題

新たな線引きの基準として、人間から発したものでなければ知識とみなせない、と言うことは可能だろう。2.2で見た情報の定義は、最広義では宇宙線や化石や試薬の反応も情報を含む。しかしこれら自体は外在的知識ではない。仮にこれらから情報を受け取るとしてもそれは情報に過ぎず、既有知識との関係で内心において内在的知識として形成されて初めて知識と呼べるものになる。このような意味で、内在的知識は再び特別な地位を得る。

知識は、人間が（自身を含む）環境に能動的に対処しようとする場面、すなわち環境条

件に整合したより有効な行動を選択しようとする志向性に関わっている。このような志向性はそれ自身をも対象化して、その上でさらに有効な選択を求めるというメカニズムを内包する。すなわち知識はより進んだ知識を求め、高度化する。

これに対し、単なる情動の表出や空想を語ったものは、それ自体としては知識ではない。ただしそれらもやはり独り歩きし、例えば幼児にはサンタクロースの物語が一つの知識として受容されるように、それが個人から見えて知識となることがあり得る。

5.4. 語られない知識

外在的知識の辺縁部における一つの難題は、意図的には表現されない要素である。

獲得された知識、体得された技能や規範や文化、固定化された感覚的形式などは、個人の内面でスキーマに組み込まれ、知識を左右する。そしてこれらは知識が表出される際、あるいは知識に基づく行動の際に、多くは自覚されず対象化されないまま、いわば知識そのもの・それに基づく行動・それによる生産物の、それぞれ一要素として表出される。

建築物の構造計算やデザインの知識と、それに基づく設計図、さらにその設計図による実際の建築物は、いずれも知識と技術的生産物双方の側面を備えている。ここにあるのは行動とその産物の中に実現された背景知識、つまりそこに生産されたもの・取られた行動にある形式を与えるという形態でのみ表出される知識である。本稿ではこれを便宜上「語られない知識」と呼ぶものの、それ自体が自立した外在的知識だというわけではない。

建築家が過去の建築物を知って、料理人が他の料理人による優れた料理を自ら味わって、またパフォーマーがライバルのパフォーマンスを見て学ぶように、知識の伝達においてこのような「語られない知識」こそが主要な役割を担うこともある。この場合、建築物、料理、パフォーマンスそれ自体は外在的知識ではない。しかしそれを学ぶ建築家、料理人、パフォーマーはそれら行動の産物を通してそこに実現された知識を見ることができ、しかもかれらにとってその種の知識の保存や伝達はしばしばそのような形でしか存在しない。

5.5. 制度化された知識

語られない知識が主役を占めるのは、技術・技能・ビジネス・芸術など、知識の増進・普及以外に活動の主目的がある場合である。これに対し知識自体が人間活動の主要な目的となる学術、教育、報道などの分野では、知識は制度化されたものになる。制度化された知識は、ある一定の社会的制度の文脈とそれに伴う規則・形式に従う外在的知識である。

例えばその1つである学術知識の場合、その研究が既存知識に新たに付け加えた知識を中心とする核心部分（例えば方法と結果の主要部分）は明示的にかつ明晰に語られなければならない。そのため一定の規則と形式（査読などのゲートキーパーの介在、学術用語、統計結果の表現方法、論文の構成形式など）に従うことが求められる。なぜなら学術の目的である知識の増進のためには知識の対象化が不可欠であり、それは学術活動全般の中で一貫して一したがつて外在的知識においても一要求されるからである。

6. 集団的知識

6.1. 知識の集団性と集団的知識

人間は他の動物と比較して、誕生時からその知的側面をも含めて社会的・集団的過程の中でこそ形成されるという際立った特徴を持つ(Portmann, 1951/1961)。個々人の知識もその初発から集団的過程の中にあり、知識について考える上で集団性の問題は避けて通れない。

他方、上掲引用箇所では戸田山は「知識のさまざまな実現の仕方」の一つとして、「集団を担い手として考えざるを得ない知識」を挙げていた。つまり一般的な集団性ではなく、知識の社会的な実現形態の一つとして形成される集団的知識があると主張している。

社会的な知識の実現形態を考える場合、この 2 つの問題、すなわち知識が本来的に持つ一般的な集団性と意図的・能動的に形成される集団性とは混同されるべきではない。以下この区別を念頭に置きつつ、まず集団性について、次いで集団的知識について検討する。

6.2. 内在的知識の集団性

内在的知識の形成は、内心での変化だけでなく、外界との情報交換も含む複合的で累積的なプロセスである。そのさい、後述のような意図的働きを抜きにしても、次の 3 つの理由で集団成員は傾向的に何らかの意味で同質的なスキーマの形成に向かうと考えられる。

- 1) 環境と経験の共有： 多くの場合、集団の成員は何らかの意味で同じ環境に晒され、また同じ環境の中での行動の経験を共有する。したがって集団の成員は、その限りで、事実認識の出発点を同じくする。
- 2) 目的の共有： 人はただ偶然的あるいは受動的に人間関係の中に置かれるだけでなく、何らかの共通の目的や動機の下に集団を形成し、そこに加わる場合がある。その場合こうした目的や動機もまたその限りで、成員の認識形成に共通の基礎を与える。
- 3) 集団内コミュニケーション： 成員間のコミュニケーションという形で表出された意見や事実認識もまた、他の成員にとって知識形成の情報源となる。集団の成員はこれらの外在的知識に接する度合いやそれらへの依存度が集団外の個人より高くなり、それらを受け取りつつ内在的知識の—そしてスキーマの—形成を続ける。その結果として集団の成員は、自覚的であれ無自覚的であれ、また同調的であれ批判的であれ、互いに影響を与え合いながらそれぞれのスキーマを形成することになる。

人は常に何らかの人間集団の中にある。したがって上で述べたような集団性は、多かれ少なかれ人間の知識を特徴付ける。集団性は認識の基盤の部分により強く関わっている。そのため集団性は、ある問題にどう答えるかよりも、何をどんな視点から考えるかという問題関心や問題枠組み、つまり叙述文における述語よりも主語の、同質性となって現れる。個々人が関わる集団の多様性と関わりの内容・程度に応じて、知識の集団性は濃淡さまざまかつ重層的である。より長期の、安定的な、目的志向的な、相互依存の度合いが強い、集団凝集性(Hogg, 1992/1994)の高い集団では、関心の同質性や時には意見の一致が、より強くなると考えられる。だがこれらの条件をすべて欠く場合（例えばたまたま出会うお

喋りを始めた2人の認識形成)でも、以上に述べた集団性と無縁であることはできない。

環境的な集団性は、直接的には内在的知識に現れる。このようにして集団性を帯びた内在的知識が外部化されれば、外在的知識も集団性を持つことになる。

6.3. 集団内知識と集団化知識

しかし知識が一般的・背景的に持つこのような集団性と、意図的な集団的知識は区別されなければならない。集団的知識はさらに集団内知識と集団化知識に別けられる。

集団内知識とは、閉鎖的集団内で知識の形成そのものを目的とした共同行為によって形成され、その集団内で共有される知識を指す。例えば、共著論文、共同調査の報告書、団体の決議や宣言文、PTAの連絡網で流された緊急連絡などがその典型である。

他方集団化知識とは、開放的集団内での知識形成行為の結果、共通の知識を持つ集団が形成され、その集団に共有される知識を言う。例えば、言論を通じて形成された世論、教育によって得られる「現代人の基礎知識」、学術における通説、バーゲン情報などである。

6.4. 集団内知識

集団内知識について考えるためには、まず共同行為について考えなければならない。中山康雄(2004, pp. 132-137)は、「共同行為は、全体の行為が個々の行為者の相互作用から生まれたものでなければならない」として、グループの共同目的の存在、それに向けた行為の構成員による分担、それらについての構成員の自覚を共同行為の条件とし、これらを論理的に厳密に記述している。ある共同目的を持つ集団が存在しなければ、またその目的に向けた行為の分担が成立しなければ、そしてそれが構成員自身の自覚の下に行われるのであれば、共同行為とは言えない。このような共同行為が、共有知識を形成するためのものであれば、形成された知識は集団内知識である。

しかしこのような共同行為が成立する前提として、先ずもって構成員が集団の目的やその基礎となる知識(信念)を共有していなければならない。同じく中山(2004, pp. 112-117)は、これを集団的志向性と呼び、集団的志向性とは全構成員がその集団の成員であることを自覚すると共に、同一のある信念(や、意図・欲求)を持ち、かつその集団がその信念を共有しているという信念を全構成員が持つということだとしている。このような状態を形成するのは集団の制度化と集団内コミュニケーションの役割である。

6.5. 集団化知識

明確な目的をもって自覚的に形成あるいは継続され、成員の範囲もはっきりとしている集団であれば、このような共同行為が成立するが、それらがあいまいな(少なくともそれらを自覚して行動することが乏しい)開放的集団では、そもそも共同行為がごく限定的にしか成立しない。また集団の規模がきわめて大きいと、その内部で目的意識や自覚の有無・内容・程度に差が生じる。その結果、ある目的や志向性を自覚して行動する者と、それとは異なる目的・志向性の下に行動する者、そのような目的意識や志向性を持たずただ受け身になる者などが混ざり合い、全体として上で見たような厳密な意味での共同行為は成立しなくなる。例えば国民という集団の目的の1つは次世代の育成かもしれないが、そう考

える者と考えない者、育成の目的・内容の違い、専門家として関わる者と直接的な関係の乏しい者、育成する者とされる者など、さまざまな立場が混在する。その結果、国民教育はある人々にとっては国民の共同行為だが、他の人々（例えば児童）にとってはそうではないという事態になる。このような状況下では、多様な目的、自らの行為への自覚・集団との関係への自覚と信頼、制度的位置づけなどを持つ人々が、それ以外の人々に向けて知識を伝えるという形で、ある同一の知識を持つ集団の形成が目指されることになる。これが、教育、報道、出版、説得、宣伝、告知などの行動である。

6.6. 集団的知識の実現形態

集団的知識は、a) 個々人の内在的知識、b) 個々人から発する外在的知識、c) 共同行為として発する外在的知識の 3 つの形態をとる。つまり集団的知識とは、形態的には内在的知識および外在的知識であり、それらと異なる第 3 の形態の共有知識といったものを想定し得るわけではない。集団内知識では、c) が知識形成の最終的な目的となる場合と、a) が最終目的となる場合がある。その過程で個々人の内在的知識が集団内で（例えば会話や文書として）外在化され、それを繰り返して a)（および b)）または c) の形成に至る。集団化知識では c) はあり得ず、a)・b)が最終的な目的である。そのため、その知識を伝える外在的知識の組織的・制度的（例えば教育・報道）または非組織的・非制度的（例えば開放的なブログ）な伝達・頒布が行われるが、それらは部分的には双方向的であっても全体的な構造は一方向的である。

また、人々を同じ環境に移動させる、人々の環境を同じものに近付ける、環境の影響力を強めるといった環境操作も知識の集団性を強める効果があり、集団化知識と併用される場合がある。例えば専門化を促すように内部組織を構成することや、企業における朝礼や QC 活動に従業員の自覚を高め共通認識を持たせる効果があることなどが、その例である。

社会は、社会全体の中に制度的に専門家集団が作られるという形で分節化し、専門的問題に関しては専門家集団の知識を参照するという形を取る。そのため集団的知識は、専門家集団の集団的知識が社会全体における集団化知識として働くという社会的構造を持つ。

7. まとめと今後の課題

本稿では、知識の社会的な実現形態として内在的知識・外在的知識があり、またそれらを基礎とする集団的知識があることを見た。これにより、知識の形成・伝達・拡散・発展・衰退等々は、対象化された知識をもプレイヤーとする一連の運動として理解可能となる。集団的知識における共同行為の意義は、それにより形成される共著論文や決議などが内心のコード化ではなく外在的知識であると認めることで、初めて明らかになると思われる。

本稿の限界として、「知識」および「外在化」概念に今後整理されるべき曖昧さが残された。例えば、「知識の塊」たる図書とそこに実現される知識そのもの、すなわち社会的制度の下でのモノとしての外在化と、モノの形をとりつつも本質的には社会的な意味での外在化とを、明確には区別していない。これらは関連し合うとはいえ別々の問題である。

文献

- Armstrong, D. M. (1973). *Belief, truth and knowledge*. Cambridge University Press.
- Borwein, J. M., & Devlin, K. J. (2009/2009). 数学を生み出す魔法のるつぼ: 実験数学への招待 (伊知地宏, Trans.). 東京: オライリー・ジャパン.
- 藤本隆志. (1988). 理解とは何か. In 竹内啓 (Ed.), *意味と情報* (pp. 285-304). 東京: 東京大学出版会.
- Hogg, M. A. (1992/1994). *集団凝集性の社会心理学: 魅力から社会的アイデンティティへ* (広田君美 & 藤沢等, Trans.). 京都: 北大路書房.
- 川崎恵里子. (2012). *認知心理学の新展開: 言語と記憶*. 京都: ナカニシヤ出版.
- 児島和人. (1999). 総論 現代における社会情報の多層的生成. In 児島和人 (Ed.), *講座社会学*, 8, *社会情報* (pp. 1-7). 東京: 東京大学出版会.
- 中岡成文. (2008). 展望: 知識/情報のインターフェイスへ. In 中岡成文 (Ed.), *知識/情報の哲学* (pp. 1-13). 東京: 岩波書店.
- 中山康雄. (2004). *共同性の現代哲学: 心から社会へ*. 東京: 勁草書房.
- 大須賀節雄[他]. (1996). *知識科学の展開*. 東京: オーム社.
- Portmann, A. (1951/1961). *人間はどこまで動物か: 新しい人間像のために* (高木正孝, Trans.). 東京: 岩波書店.
- 高野陽太郎. (2013). *認知心理学*. 東京: 放送大学教育振興会.
- 戸田山和久. (2002). *知識の哲学*. 東京: 産業図書.
- 吉田民人. (1971). 社会科学における情報論的視座. In 北川敏男, 香山健一 & 吉田民人 (Eds.), *講座情報社会科学*, 5, *情報社会科学への道* (pp. 123-163). 東京: 学習研究社.

Abstract

Two forms of social realization of knowledge, the external knowledge which does not belong to an individual and the internal knowledge which stays in an individual's mind, are discussed. They are related but should be differentiated to each other. In traditional information sciences, the former is regarded as 'information' or a coded form of the latter. But in the present paper's view, both of them are considered irreducible to mere information. On the basis of the concept of these two forms, the collective knowledge, which is differentiated to the collectivity as a nature of human knowledge, is also defined. Two types of collective knowledge exist: the in-group integrated knowledge in a closed group and the group integrating knowledge in an open group. In-group integrated knowledge is formed under the cooperative action of the group members. With the conceptualization of external knowledge, we shall be able to comprehend the whole movement of knowledge in the society.